

提出日:2014 年(平成 26) 9 月 30 日

阿武川源流ワーク&スタディキャンプ事務局

代表 伊藤丈



申請事業名:

川上すぎのこ村・野戸呂の森に地球の木を育てよう
第7回・第8回 阿武川源流ワーク&スタディキャンプの開催
(子ども国際キャンプ同時開催)

1、はじめに(申請団体の設立目的、活動の背景、今後の方向性、「川上すぎのこ村」について)

阿武川の源流域も例外ではなく少子高齢化が進み、過疎地域として空き家や休耕地が目立ってきている。この地域に国内外の元気な若者が入り、短期間ではあっても公共的な場で汗を流し、地域住民らと交えた異世代・異文化交流を通じて、誰でもが穏やかに共に生きていける地域づくりに寄与することを目的に設立したキャンプ事務局である。

当面の主な舞台となる川上すぎのこ村(旧川上村立野戸呂小・中学校跡)は、特定非営利活動法人すぎのこジャンボリー委員会が管理していることにはなっているものの、ここ数年は利用されておらず、法人も休眠状態となっている。当キャンプ事務局の代表が同委員会の代表理事を昨年に引き継いでおり、来年の夏までに同委員会の理事会を再構成して法人運営を正常化し、同委員会による川上すぎのこ村の管理運営を軌道に乗せる予定。当キャンプは、地域とのネットワークづくりも意識しており、そのネットワークが川上すぎのこ村を長期的に支える母体になることも願っている。

なお、今後もキャンプの主会場は川上すぎのこ村となるが、近隣の廃校跡やあまり利用されなくなった公共施設や空き民家、休耕地などの所有者らと連携しながらキャンプを組み立てていく予定。

「川上すぎのこ村」について:

旧川上村立野戸呂小・中学校。1875(明治 8)年、「野戸呂支校」として開校。1978(昭和 53)年に小学校としての 103 年の歴史を閉じる。同時期に中学校も 30 年の歴史を閉じる。その後、1983(昭和 58)年に当時の川上村社会福祉協議会が事務局となり県内の福祉関係団体と連携して「子どもジャンボリー」(子ども交流キャンプ)を開催。「障害者野外活動センター 川上すぎのこ村」と命名し、再利用が始まる。2002(平成 14)年には「特定非営利活動法人すぎのこジャンボリー委員会」が川上村社会福祉協議会から事務局を引き継ぎ現在に至っている。

川上すぎのこ村はノーマライゼーションの理念普及を目的としており、自然の中で人間だけでなく、そこに住む他の生き物たちとも仲良く共存できる場となることも願っている。萩市健康福祉計画の基本理念にもノーマライゼーションを置いており、「高齢者や障害者など、社会的に不利を負う人々を当然に包含するのが通常の社会であり、そのあるがままの姿で他の人々と同等の権利を享受できるようにし、ともに社会の一員として生活し、

4、キャンプ日程

(第7回キャンプ) 2013年8月9日～19日(10泊11日)

<事前作業日程>7/20(土)・21(日)・24(水), 8/3(土)・4(日)

草刈り、竹林伐採、仮設トイレ・仮設薪置き用テント設営他。

<日々の基本時間> 朝食は6:30頃より随時、8:00作業等開始、夕食後は自由。12:00消灯。

8/9(金)午後 JR山口線「篠目駅」に出迎え。移動。キャンプ説明・メンバー紹介。

夕食後より「野戸呂すぎのこ合唱団」を結成し、校歌「野戸呂校」の練習を始める。

8/10(土) 午前 公開講座 講師:渡邊雅治さん(山口県森林部森林づくり推進課)

「野戸呂川・源流の森を歩こう ～石垣棚田・堤を築いた先人を偲びながら～」

野戸呂すぎのこ交流＝歓迎昼食会(来賓予定:助成・後援・連携協力団体関係者)

校歌「野戸呂校」合唱、参加者自己紹介、来賓挨拶他

紙芝居・やべみつのり作品上演会① 演者:子どもたち

8/11(日)・12(月) 近隣の被害発生地域へ災害ボランティア(浸水民家の泥かきなど)

8/13(火) 子どもを交えた共同作業&創作・里山文化体験+川遊びなど

8/14(水) 午前、国宝「瑠璃光寺五重塔」・「中国残留婦人慰霊の碑」(山口市)見学。

後、夕方迄自由時間

8/15(木) 「阿武川歴史民俗資料館」「阿武川ダム」見学、「阿武川温泉」入浴(希望者のみ)、

高齢者施設「かわかみ苑」訪問交流、「平助・権太 二義民の碑」見学、

「かわかみ夏まつり」参加

8/16(金)・17(土) 子どもを交えた共同作業&創作・里山文化体験+川遊びなど

8/18(日) 昼 野戸呂すぎのこ交流＝各国料理での謝恩昼食会

校歌「野戸呂校」合唱、参加者紹介、共同創作作品紹介、体験報告他

紙芝居・やべみつのり作品上演会② 演者:萩原秀信さん

第2回野土呂の森・地球の木 植樹会&記念写真

8/19(月) 朝食後～ 校舎内清掃・床拭き、シーツ水洗い、荷物整理・帰国準備。

10:30 川上すぎのこ村出発 JR山口線「篠目駅」前に移動し解散式。11:12 見送り。

(第8回キャンプ) 2013年12月27日～2014年1月7日(11泊12日)

12/27 午後、JR山口線篠目駅に出迎え。移動。キャンプ説明・メンバー紹介

「野戸呂すぎのこ合唱団」を結成し、「校歌野戸呂校」の練習を始める。

12/28 歓迎会+公開講座

12/29 旧半田小学校の大掃除手伝い、萩焼の登り窯見学、交流会

12/30 共同作業(清掃、薪割り、文庫づくりなど)

12/31 共同作業 午後より参加者による年越し自主企画

1/1 野土呂集落の新年会で挨拶、初詣(希望者のみ)

1/2 老人施設かわかみ苑訪問交流 後、萩市街での観光と自由時間

1/3～5 共同作業(清掃、薪割り、文庫づくりなど)

1/6 謝恩会+キャンプ参加者による異文化体験報告会+「野土呂の森・地球の木 植樹会」

「CIEE阿武川源流文庫」「CIEE阿武川源流薪庫」開設紹介

1/7 朝食後、後片付け・帰国準備。JR山口線篠目駅前に移動し解散式。見送り。

5、キャンプ活動の成果

(1)短期的な成果について

①「地元の土や石、間伐材や竹など、身近な素材を使った共同での創作体験・ものづくりを織り込んだプログラムを確立する。」という当初の目標について、概ね、確立できた。特に、薪割り

は国内外を問わず、若者たちには楽しい体験となることが確認できた。

②「ハンディキャップを持った子どもが保護者と共に気軽に利用できる場としての整備が進む」という当初の目標について、前進はしたものの、まだ解決すべき課題(危険箇所の対策)は残っている。

③当初の計画外ではあったが、キャンプ直前に発生した近隣での水害にあたり、地元のボランティアセンターを通じて救援ボランティア(主に民家の床下に流れ込んだ泥のかき出し)に参加した。被災された高齢者世帯の復旧労力の軽減に少しばかりではあるが役にたてた。また、参加者にとって、予定外のプログラムではあったが、貴重な体験として記憶に残ったとの感想が寄せられた。

(2)長期的な展望展開について

今後もしばらくは、キャンプの主会場を川上すぎのこ村とするが、2014年の夏以降のキャンプは、「すぎのこサマースクール」(主催は川上すぎのこ村)の関連企画として位置づける。副会場をあまり利用されていない歴史民俗資料館(室)や図書館、公民館や廃校学校として活用できるように働きかけていく。また、老人施設や児童養護施設なども連携し、地域の歴史学習や多世代・多文化交流などを通じて、多文化共生型地域社会づくりを進めるための「種まき」的な役割を担っていく。

(3)社会的な波及効果について

少子高齢化が進む山間地域で廃校となった学校や利用されなくなった公共的施設を多世代・多文化交流の拠点として再活用するモデルが出来つつある。その交流活動や里山暮らし体験を通じて下流域に住む若者が源流域(山間地域)へ移住するきっかけづくりになる。(まだ移住者はいないが。)

また、当キャンプに当然のこととして何らかのハンディキャップを持つ友人たちが参加することにより、「障害」を「福祉」や「医療」の対象としてでなく、「社会の障害」「人権の問題」として考える成熟した市民社会を育てるのにわずかながらも寄与できればと考えている。

6、今後の取り組みと課題

その後、第9回(2014年7月)及び、第10回(2014年8月)阿武川源流ワーク&スタディキャンプを既に開催した。約3年間をかけ全10回のキャンプを終えた。2014年夏に当キャンプ事務局が主催する形で「第1回すぎのこサマースクール」(添付資料参照)を開催しており、第9回・10回キャンプを「同時開催企画」として位置づけている。会場となった川上すぎのこ村(土地は萩市より無償貸与、旧校舎はNPO法人「すぎのこジャンボリー委員会」が所有)に拠点を置く同法人が休眠状態を脱し、再出発をするための裏方仕事をほぼ終えることができた。今後も引き続き当キャンプは川上すぎのこ村を主会場として開催を継続する。同法人は自治体の財政的支援を受けず、個人会員からの会費収入を基本に旧校舎を含む学校地を継続的に保全管理する方向であり、当キャンプとの連携を継続する。差し当たり、第11回キャンプを2015年新春に予定している。

なお、第2回以降の「すぎのこサマースクール」は、法人「すぎのこジャンボリー委員会」が主催者となり、2015年夏の第2回すぎのこサマースクール期間中に第12・13回キャンプを開催する予定。

また、「野戸呂の森・里山アートワークキャンプ」(週末キャンプ)を随時開催し、「野戸呂地

球窯」(陶芸窯)を使い、持ち寄った小石と野戸呂の土を混ぜて作品をつくり、それらの集合体を「野戸呂校 開校150年記念碑」(仮称)とし、開校150年にあたる12年後の2025年に完成させる予定。

今後も課題を多々抱えるであろうが、課題を乗り越える過程を通じて、国籍や世代を超えた連帯感を育むための「場」を提供し続けていきたい。多文化共生型社会の前提には、共に生きていくことを選択できる自由があり、誰もが穏やか豊かに暮らせる「ノーマライゼーション社会」の実現は、すべての人権が尊重される成熟した民主主義社会の実現へ繋がることと信じている。